2017年10月31日　読売療育賞　（西部3社）

読売療育賞最優秀賞
那覇の障害者施設に

重症心身障害者施設の優れた実践研究を表彰する「第13回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）が決まった。最優秀賞は、自力で寝返りができない利用者の背中などにかかる圧力を減らすための方法を研究した沖縄南部療育医療センター（那覇市）で、記念の盾と助成金50万円を贈る。助成金30万円を贈る敢闘賞には、ソレイユ川崎（川崎市）、長岡療育園（新潟県長岡市）、愛知県心身障害者コロニーこばと学園（春日井市）の3施設が選ばれた。

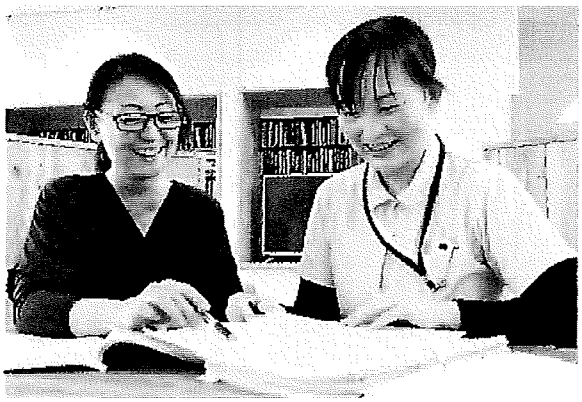
同センターは、利用者15人が様々な姿勢でベッドに横たわった際の圧力のかかり方を計測した。ともに理学療法士で、共同で研究した上原久人さん(28)と小野泰輔さん(35)は「受賞はとても励みになる。実践的なデータが得られたので、今後の療育活動に生かしていきたい」と喜びを語った。

研究成果について意見を交わす小野さん(左)と上原さん（27日、那覇市の沖縄南部療育医療センターで）

「ソレイユ川崎」2人敢闘賞

読売療育賞

人工呼吸管理や災害対応 研究



研究が敢闘賞に選ばれた和田さん（左）と星さん（川崎市麻生区で）

重症心身障害者施設で働く職員の優れた実践研究を表彰する「第13回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）の敢闘賞に、川崎市麻生区の「ソレイユ川崎」に勤める看護師の和田詩子さん(45)と管理栄養士の星華子さん(40)が選ばれた。

和田さんは、人工呼吸管理が必要になった重症心身障害者の在宅移行についての研究を発表した。脳性マヒや慢性的な気管支炎などを患う男性が、インフルエンザで呼吸不全に陥り人工呼吸機器を装着。在宅療養を可能にするために、施設で受け入れ、母親などに機器の使い方などの医療的ケアを指導し、自宅に戻るまでの過程をまとめた。

通常は搬送先の病院で治療を受けた後、口頭などでケアの仕方を教えるが、施設の部屋で日常空間を作り出し、その中で指導したという。和田さんは「一度聞いても理解できないことが多いかもしれない。しっかり理解して日常生活に戻ってもらいたい」と話した。

星さんは大災害時を想定した炊き出し訓練についての研究を発表。東北や熊本で震災があり、首都直下型地震も心配される中、災害発生時のために非常食を用意するだけでなく、誰もが調理し食事を提供できる必要があると考えた。

流動食しか食べられないといった、それぞれの施設利用者に合った食事を提供することは、非常時には困難が伴う。訓練では、食事の作り方を事前に決めるなど準備し、利用者ごとの食事を1時間で出すことができた。星さんは「訓練を重ねればもっと時間を短くできる。今後も時間だけでなく、どの職員も非常時に対応できるよう訓練したい」と力を込めた。

星さんの研究には、管理栄養士の鈴木恵美さん、調理師の栗原健一さん、黒嶋春雄さんも参加した。

ミルクジャム（栃木県）

牛乳から作で、ほんのりてお り、口にと溶ける。濃厚が、練乳ほどこくなく、牛乳来の風味を生甘さが特徴だ。

原料の生乳は約200頭しおれる「ガーン

「南ヶ丘牧場」の従業さん「きな粉とあんこのレーン味のジャムをかけてください。とてもおいしさが厳しさを増すこのーヒーや紅茶に入れて飲すめです」

（第3種郵便物認可）　2017年(平成29年)11月22日（水曜日）

長岡療育園に敢闘賞

読売療育賞　利用者の笑顔引き出す

重症心身障害者施設で働く職員の優れた実践研究に贈られる「第13回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）の敢闘賞に、長岡市深沢町の「長岡療育園」が選ばれた。寝たきりで言葉を理解できない人に対し、どう接すれば笑顔や穏やかな表情を見せてくれるかを調べ、声をかける聴覚刺激や体に触れる触刺激が有効であることを実証した。

研究は昨年度、保育士の五十嵐美苗さん(41)、平沢友子さん(34)、岩佐由香子さん(36)らが中心となって進めた。3人が働く病棟はたんの吸引や経管栄養など医療依存度の高い利用者が多く、ほとんどの人が言葉を発することができないため、実際に何をどう感じているか、推測するしかなかった。

そこで同園は、刺激に対する利用者の反応の仕方によって、「わかりにくい」「相手に要求や意思を伝えようとする」など独自に7段階に分類。このうち「不快な感情表現が見られる」段階の25～49歳の男女8人を対象に、笑顔や穏やかな表情、リラックスといった心地よい「快」の様子を見せた時の口や目、手の動きなどを細かく観察した。

10年以上同園を利用する37歳の女性の場合、抱きかかえて触れながら耳元で声をかけると、笑顔が出せるようになった。岩佐さんは、「どうやったら『快』の表情を引き出せるか、支援の目標が明確になった」と手応えをつかんだ。

五十嵐さんは「自分たちの支援方法が良いのかどうか不安があったので、受賞は自信になる」と言い、平沢さんも「これからがスタート。一緒に勤務する人にも理解してもらい、継続して取り組みたい」と語った。

利用者に笑顔を見せてもらうため、声をかけたり触れたりと支援を工夫する（左から）平沢さん、岩佐さん

USO放送

シャンシャン12月中旬公開
興味シンシン
―パンダファン
（長岡・お釈迦）

（第3種郵便物認可）

読売療育賞

こばと学園に敢闘賞

春日井の県障害者コロニー

重症心身障害児者施設で働く職員の優れた実践研究に贈られる「第13回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）の敢闘賞に、春日井市神屋町の県心身障害者コロニーこばと学園が選ばれた。長年中心になって実践研究してきた岩田直子さんは「これからも、みなさんに満足してもらえ、生活の質の向上につながる支援を続けていきたい」としている。（大隅清司）

食事の介助をする岩田さん

食事介助ノウハウ共有訴え

自力で食べることができない重症心身障害児者（障害児者）の食事介助は単なる生活支援の延長ではなく、医療支援に匹敵する高度な知識や技術が求められ、そのノウハウを福祉施設間で情報共有する必要性を訴えたことが高く評価された。

岩田さんは、20年以上にわたって障害児者と関わり、現在は、摂食・嚥下障害看護認定看護師として活動し、「障害児者の食事介助の重要性が認められてうれしい」と受賞を喜ぶ。

こばと学園には、重度の知的障害と肢体不自由が重複する5歳から72歳までの障害児者約100人が入所し、24時間一緒に生活している。しかし、医療支援よりも生活支援を重視した生活を希望して、別の福祉施設に移るケースもある。

その中で、40歳代の男性と30歳代の女性が別の施設でしばらく生活した後、口から食事を取る「経口摂取」が困難になり、鼻から栄養補給する方法や胃に管を通して食物や水分を入れる「胃ろう」の処置が検討された。しかし、同学園に戻って摂食嚥下機能訓練を行った結果、以前と同じように経口摂取ができるようになった。

岩田さんはこの事例を分析し、障害児者の個別性に合わせた介助技術の重要性を指摘。一人ひとりの機能だけでなく、食事をするときの姿勢の調整や口の開閉、舌の動きに合わせてタイミングよくスプーンを持っていくなど、介助する方法によっても経口摂取を継続できるかどうかが左右されることを明らかにした。

岩田さんは「施設によってそれぞれの役割は違う」とした上で「こばと学園には、50年近くにわたって蓄積された食事介助の知識や技術があり、これを生かして、ほかの福祉施設や在宅支援機関と連携し、障害児者の支援体制を充実させていきたい」と話している。